

松井健児

冴子

Saeko



京都芸術大学出版局

目次

晩秋の沼辺

晩鐘

美しきロスマリン

田島が原

記念祭

三溪園

インターハイ

クールベの女

今月
五
五

記念祭

今日は高校の記念祭の日である。冴子は友人二人と来ることになっている。

まだ、男女共学ではない時代である。

男性だけの聖域を垣間見るだけでも 女性にとって興味深いことだろう。

校内に大勢の女性が見られるのは、高校生にとって、晴れがましい気分である。

日本全国に、三十校程しか高校が無かった時代、高校があることだけで町の誇りであった。

昭和二〇年三月末、浦和市の一部が消失したとき、新一は入学が決まっていた高校の豪華な檜造りの本館が轟轟と燃え上っているのを 目の前にして、深い悲憤をおぼえた。

今、焼け跡は空き地のままになっている。二万坪の林の中に建屋が点在していたので、幸い寮や実験室等は焼けずに済んだ。

現在のような接待施設は一切作られていない。食堂でお茶を飲みながら、せいぜい家族達の持参品を頂くという程度である。

運動部単位で居住されている寮の各部屋は、思考を凝らして飾られている。

新一の乗馬部は、竹ひごに新聞紙を貼り付けた天馬を天井から吊り、新聞紙 泥絵の具 敷布や布

団で雲や野原を表現し 裸電球で照明されている。着の身着のまま時代の苦肉の作である。

それでも、冴子達は幻想的で面白いと褒めてくれる。

当時、一高生による 西田幾多郎の「善の研究」をもじった「膳の研究」、また「寝台白布 これを父母に享く 敢て 起床せざるは 孝の始めなり」が新聞に紹介され話題になっていた。

仮装行列が始まる。と言っても一斉に歩くのではなく、てんでばらばらである。新一は、祖父の家から持ち出した、鹿の角を付けて山中鹿之助。渋谷龍雄『後の龍彦』は、マントを羽織って、徳利と杯をもって、哲学者風に小首をかしげながら歩いている。圧巻は美少女に扮した一年生が、真知子巻とハイヒール姿で、山高帽の上級生と腕を組み颯爽と歩いている。参観の女性たちから溜息がもれる。友人達もあきれて見とれている。

髭を剃り、頭をセットし、白粉と紅で綺麗に化粧した姿は、どう見ても女性としか見えない。なんとなく、先輩が羨ましい、

日が暮れ、訪問客の姿が消えた 二万坪の校庭の真ん中に、木の枝と丸太がうず高く積み上げてある。寮長による 厳かに点火の儀式がすむと、いよいよ待ちに待ったファイヤーストームである。

パチパチと火の粉を噴き上げる焚火を 輪のなつて囲んでいるのは、腹の凹んだ細身の学生総勢二百人。寮歌斉唱が始まる。

五月の野辺にことしました めぐり逢いぬる記念祭

武蔵野遠く望むとき

桐の香淡く胸に満つ

校歌

大いなるかな武蔵野は

天の紺碧地の緑

そうぼうとして果てもなし

ああ人生の朝にして

自由の翼音高く

理想の国を天翔ける

朴齒を蹴り上げながらデカンショ節が始まる。

デカンショ デカンショで半年暮らす

後の半年 寝て暮らす

教師 教師と威張るな 教師
教師 教壇の飾り物

息子 息子と威張るな 息子

息子 親父の 一滴

万里の長城で 小便すれば

ゴビの砂漠に 虹が湧く

論語孟子を 読んでみたが
酒は飲むなと 書いてない

三溪園

「いいものがあるぞ」、鈴木が突然駆け出した。

新一と冴子は何事かと彼に近づいて見ると、

草地の上に、手を着けていないキャメル三本、ビスケット フランクフルトソーセージとサンドウイッチの食べ残し チョコレート 干しバナナらしきもの 固形スープ等々である。

まだ見たことがないものもある。

明らかにGIのランチの食べ残しだ。

勝っている時ですら乾パンか、生米、梅干し位しか支給されなかったた日本兵に比べ、これを見ただけでも 負けても仕方がないと思われてくる。

「二人も座って食べろ」と促す。

二人は呆れて 思わず顔を見合わせた。

彼は まだ手がついていないものを選びながら、むしゃむしゃと食べ始めた。

上野駅周辺は戦争孤児で溢れ、公園で弁当でも開こうものなら、忽ち周囲から汚い手が伸びてくる時代である。彼の行為は非難すべきでないだろう。しかし、新一は冴子の態度が嬉しかった。

新一が冴子を好きでしようがないのは、おっとりとして茫洋なところが彼に 似ているからだろう。鈴木は、二人と違い、世事にたけていて、如才なくそのうえ強引なところがある。

夏休みのある日、二人で部屋にいるのを見付けた彼は、いきなり、新一にキスを仕掛けた。その口で冴子の唇に触れた。

新一は拒絶しようと思ったが、冴子とは出来る限り深く長く繰り返すことで防御した。驚いたことに、冴子は彼の動作にも素直に応じているようである。

新一は嫉妬と異質な興奮を味わう。

やがて、三人は何もなかったかの如く平静に戻った。

新一は冴子の素直過ぎるのが腹立たしかった。油断禁物！

！

その後この事件について触れることを二人は避けた。

この丘の樹間に東京が見え隠れする。

たった一度の空襲で焦土と化したと横浜には、未だに大勢のG I が駐留しており、この近辺は広大なキャンプ地になっている。

接する三溪園の一部は東京湾に接している。三人は裸足になり、岩と砂地の触感を楽しんだ。

大きな円形の蓮池に映る五重の塔が本園の中心的景観であったが、戦時中 田んぼに転用され、いまだに復旧されていない。

溪流を作り、古民家を移住した人工の里山の風景は蘇りつつある。
新一は、僅かに紅葉が始まった里山の風景のスケッチを始めていた。